

た。が、もう消え失せたのかと思ふと暫らく経つて、又僅かに喉のあたりが動いた。周囲の人々は只手を拱ねて、今はだん／＼微かに、緩くなつて行く呼吸を、ちつと此方も息を呑んで見凝めなければならなかつた。

枕邊に近いお嬢さんたちの間からは、堪へ切れぬ歎歎の聲が、たゞ寂寞を破るまじりだつた。

一分、二分、かうして時は過ぎて行つた。先生の息は益々微かになり、そして有無の限界が分らなくなつた。が、人々はまだ、先刻からの状態の連続で、もうそれが長期の呼吸だとは、誰も思はずに見凝めてゐた。が、その時病床の右手に坐つて、ちつと様子を見てゐた眞島氏が、手で妙な合圖を奥さんにした。小野にはその意味が解らなかつた。と、夫人は先生の額の上に蔽うてあつた白布を眼の處まで下げて、靜かに先生の眼を隠すべく、幾度かそつと撫で下した。それが濟むと眞島氏は、もう一度無言で指圖をした。今度は夫人は先生の口を靜かに閉させ始めた。よく見るといつの間にか先生の呼吸は、天地の寂寞の中に潜み入つて、靜けく消え去つて了つてゐた。

眞島氏は聴診器を取り出した。そして先生の胸にかけた毛布を取り除けて、心臓のある胸部の上にとつとその白い象牙の尖を載せた。そしてちつとそこから指を放して、靜かに器を放置したまゝ、その中の音に聞入つた。それから更にもう一度少し上の方へ、其聴診器を移して、同じやうに聞入つた。その後からは今度は又傍にゐた矢部氏が同じく聴診器を心臓の上に當て、二人とも端然と暫らく耳を澄ましてゐた。それは醫師の禮法といふよりは、寧ろ宗教上の儀式のやうにさへ思はれた。皆は固唾を呑んで見てゐた。と、もう何の音も聞えなかつたと見えて、やがて聴診器を靜かに撤した眞島氏は、「お氣の毒でございます。」

と、夫人の前へ頭を下げた。

それを聞くと皆も同時に肅と頭を垂れて、何ものとも知れぬものに禮拜した。

萬事は休したのだ！先生の頭の上には、雪白な布が蔽はれて、もう温顔を見る由もなかつた。見たところで何にならう。先生には息がないのだ。あの理智と温情とに満ちた眼は、もう永久に閉されて光りを失つたのだ。先生は死んだのだ。今、自分の眼の前で死んだのだ。——小野にはそれが夢のやうな、現實として信ぜられないやうな氣がした。が、現實には違ひないのだ。

小野は暫らく呆然として、夫人が、『さあ皆さんどうぞ立ち下さい。』と氣丈な聲で促されても、そこに先生の遺骸を見凝めたまゝ立ち盡してゐた。向うの隅では畫家の須山氏が、泣き崩れて立たうともしなかつた。が、夫人に促されて、涙を拭つてやうやく立上つた。小野もその畫家の純粹な涙を見ると、やうやく熱くなつて來た臉を抑へてそこを立去らねばならなかつた。

戶外はもうすつかり濃い闇だつた。廊下へ出るとその暗い夜の空に、庭の芭蕉は更に陰暗たる悪魔のやうな翹を、しんと四方を蔽ふやうに垂れてゐた。

黒田と杉浦とは、たうとう臨終の間に合はなかつた。鎌倉の柳井もたうとうそれ迄には到着しなかつた。

第 四 章

先生死後の勝見家は、悲愁と混亂に閉ざされてゐた。急を聞き傳へた、各新聞の記者たちが来る。弔問者たちが駆けつける。電話がかゝる。……さういふ中に在つて、今師の臨終に逢つたばかりの涙の乾かぬ弟子たちは、各々自分一人の家へ歸つて、悲しい思ひ出に耽るなどといふ餘裕はなかつた。勝見家の人々は勿論だつた。今未亡人となつたばかりの響子夫人も先生の實兄の長三氏も、直ちに臨終の室を出ると、もう其後の色々な準備に忙殺されなければならなかつた。夫人たちは弟子の中の主だつた、大寺氏や松木氏らと一室に集つて、直ちに葬儀の手筈や、遺言に従つて先生の遺骸を大學病院へ解剖に送ることや、「死顔の想像」を取ることなどを相談し、決した。外の弟子たちも、凡て各々手配を定められて、人手の足りない勝見家の、悲しい用事萬端を手傳ふことになつた。

小野もその一員だつた。遅れて来て、たうとう臨終の間に合はなかつた杉浦も、又自分の妙な確信に油断して、電話を頼んで鳥渡歸つたために、つい大事な恩師の死目に會へなかつた黒田も、遅れ着いて既に白布に蔽はれた、息のない先生の死顔を拜して、喪の室を出るとすぐその一員に加はらなければならなかつた。小野と杉浦と黒田と、それからまた先刻小野と一緒に生顔を拜した原田とが、取り敢へず受附の役に廻つて、玄關に控へてゐる事になつた。これらの四人は、みな同じ位の年齢で、同じく大學を出たばかりだつたり、もうすぐ出るばかりの連中だつた。が、どうしたのかまだ、鎌倉にゐる柳井は、この急な場合に到着しなかつた。彼も来てゐれば、必ずこの少壯の一團の中へ、當然加へられる人だつた。彼らは先生の門下の中でも、比較的後輩の新進の一團だつた。先生が生前、曜日毎に面會を許してその書齋に集めては、種々の文學談や雑談を交した、所謂「木曜會」に来る弟子どもの中では、最も年少氣鋭の連中だつた。

尤もこの五人の中でも、時間的に又私的に見れば、先生及び先生の家に對して、少しづつ親疎の差があつた。中では、原田が最も古くから、先生の家へ出入りしてゐた。彼はもう五六年前高等學校へ入るとから、親しく先生の門に入つて、先生に精神的及び物質的の兩方面から多大の庇護を受けてゐた。殆ど彼は、先生の書生のやうに、親しくその家の人々とも知り合つてゐた。そして先生からも相應に可愛がられ、大學の授業料が足りないときなどは、先生に出して貰つたりする位までになつてゐた。が併し、原田は天性の一種の大事取りと、物解りがすると同時に、極めて弱々しい頭腦の所有者である爲に、文學上の創作やその他の方面では、少しも業績を擧げてゐないので先輩の弟子や仲間のお者どもからは、さう重きをおかれてゐなかつた。早くから先生の門になど出入することが出来て、矢部氏や佐々木氏や米田氏や大寺氏などの先輩に伍して、文學的に頭腦が早熟して了つた彼は、理解だけが先に進んで、今更ながら手腕の方の書くことは非常に退嬰的になつて了つてゐた。今更詰らないものを書いて、先生や弟子たちの信望を、——それとてさうある譯ではないが、少くともまだ疑問に屬する彼の才幹に對する批判を、自らはつきりさせて了ふことは、なまなか批判の眼が開いてゐるだけに、彼の細心な、臆病な、女々しい性質が許さなかつた。要するに彼は先生の指導に依る頭腦だけが進んで、自分自身の實行力の伴はない、最も『弟子』としての、悲惨なる型に屬してゐた。が、併し彼は敏感な、神經質な一種の秀才には違ひなかつた。白い、弱々しい細面の、優しげな目鼻立ちではあるが、何となく病的な意志の薄弱な様子と、おどろ／＼してゐるやうな神經過敏が、一目で彼の顔容から受取られた。彼の筋の通つた白い鼻は、何故か先の方へ来て、柔かく斜に歪んでゐた。それがいかにも彼の弱い、意氣地なげな性質を、象徴してゐるかのやうだつた。けれども、前に云つた通り、彼の性格は弱いながらも、陰性を優しい親切に満ちてゐた。そして小野もその才能や性質に

は、さう尊敬と同情とを持ち得なかつたが、彼の親切には常に感謝の意を持つてゐた。——彼は初めて小野を先生の許へ連れて行つて呉れた人だつた。

……それは御大禮のある時分、前年の秋のことだつた。小野は一人下宿を立出て、その日本郷通りを通過するといふ、祝ひの花電車を見ようと思つて、大學前のアスファルト道を散歩してゐた。するとその途上でやつぱり同じく花電車を見に出た原田と、偶然一緒にそこをぶらついたり、佇んで電車を待つてゐる間に、いろ／＼な話の末、談はたま／＼澁石先生のこと及び、先生に對する小野の思慕を聞くと、彼はそれならいつでも先生の所へ連れて行つてやるといふやうなことになるので、初めて澁石山房へ行つたのだつた。

それも併し、外の人々の見る所によると、原田が柳井や小野たちを喜んで連れて行つたのは、彼自身の木曜會に對する勢力を、少しでも示さうといふためだつたと、後になつて云はれたことであつた。と云ふのは、その時分の木曜會は、殆ど次に述べる後進の黒田一人に依つて占領されてゐるかの有様だつた。そしていつの間にか原田などは、隅つこの方に僅かな存在を保つてゐるといつた風な形勢になつてゐたからだつた。

黒田は、ある地方の高等學校から、大學へ入るとすぐ、妙に直截明快な論評を以て、『原と、きす』などの誌上へ、堂々たる論文を發表してゐた、新進氣鋭の批評家だつた。そして彼はその誌上に、或時長い勝負濠石論を發表して、それに依つて先生に知られ、一種の感謝狀を貰つて、それ以來先生の許に出入し、知遇を受けることになつたが、彼はその木曜會へ来るや否や、彼のあらゆるものを刳ね飛ばすやうな元氣と、高く響く甲高い辯舌とを以て、ひとり喋舌り、一人で先生と應答して、

他の人々は唯々彼の辯舌を、ひそかに恐れ、ひそかに輕蔑しながら、彼一人の跳梁に、全然任して置かねばならぬやうな状態だつた。殊にその頃彼はある痴情を以て有名な中年の作家を、頭から罵倒しつくした上、また『類廢文學の撲滅』なる一文を以て、その頃流行の頂にあつた遊蕩小説を、眞つ向に論難したため、その論理に幾多の缺點はあつたにしても、その意氣の壯と思想の豪健とを、一種の誤解さへ持たれた程、世間から喧傳され、一時に有名な批評家となつて了つて氣を負うてゐたため、彼は益々木曜會の席上に常に殆ど一人で切つて廻してゐたかの觀があつたのだつた。

勿論先輩の弟子たちも、時々一人二人づつはその木曜會へ來た。そしてその先輩たちは何といつても一座の、先生に對する弟子の中樞をなすには違ひないが、その頃は先輩の弟子たちも常には來るといふ程でなかつたので、一座は自然若い人達が多かつた。そしてその中では何といつても、黒田の勢力に押され勝ちだつた。で、黒田よりも古い併しながら同年輩の原田が、だん／＼自分の勢力が失墜するやうに感じ、ひそかにまた黒田の人もなげな辯舌を苦々しく思つて、それに對抗すべき一種の新人を連れて來ようと、敢て柳井や小野を伴つて來たやうに、他の人たちが觀察したのも、あながち理由のない譯ではなかつた。

が、併し四人は、別に敵視し合つてゐる譯では、決してなかつた。小野も柳井も、黒田の殆ど他人に口を出させない程の、獨占的な饒舌には、陰ながら苦々しく感じたこともあつたが、併し、やつぱり何と言つても、一種同門の友誼が、だん／＼雙方の好意を深めて行つた。そしてその頃では、殆ど親友同様に、往來する程にさへなつてゐた。

殊に先生の死は、彼らの間にある小感情を、悉く同一の悲悼を以て溶がし去つた。彼らは今何ら甲乙のない位置を以て、玄關の傍に座を占めながら、いろ／＼な應接に従ふ事になつたのだつた。

殊に通夜の第一夜には、勝見家の家族一同が、親族知己や弟子たちと共に、謂はど一堂に會したの
 で、改めて互の印象を、はつきり刻む機會を與へたやうなものでつた。
 夜が更けて、親族や知己の人々の弔問も絶え、さし當りの用務も片づくくと、皆は先生の遺骸を安置
 してある、書齋の方へ集つた。先生の關係してゐた、新聞社の主だつた人々や、親友の大學教授たち
 や、高等學校の先生たちや、先輩後輩の別なく、弟子たちの殆ど凡てが、書齋に隣る客間の隅々に、
 火鉢を擁し合つて、蕭かに集つた。夜は深く、風は落ちて、外の破れ芭蕉をばさつかす音もなかつた。
 未亡人初め、家族の人たちは、一團となつて、先生の遺骸の枕頭の方へ、寄り塊まつて座についた。
 蠟燭の数を加へて、灯された燈明の明りは、電燈の光りの中で靜かに揺らめきながら、そこらを悲し
 くも明るく、隈どつて照らしてゐた。先生が愛玩された、支那の泰山の河床にある、石に彫りつけた
 六朝時代の字だとかいふ、大きな石摺を貼り合せて、『名園有別天地』といふ六字の屏風が逆さまに立
 てられた下には、白布に蔽はれた先生の遺骸が、まだ寝てゐるかのやうに横へられてあつた。そして
 その前には、低い經机の上に、先生の洋服姿の近影が、少し横目で、並み居る弟子たちを睨んでゐ
 た。香煙は今、慌しい用務に忘れてゐた未亡人の手に依つて、悲しみを新にするやうに挿し加へら
 れた。それは夥しい線を曳いて、靜かにもつれ合ひながら、その前の香爐から立ち騰つた。
 小野は客間の片隅の、右の端の座に、黒田や原田や杉浦と一緒に火鉢を圍んで通夜の末席を占めて
 ゐた。そしてその座は偶然、家族たちがゐる座と、殆ど正面に向ひ合つてゐた。
 小野は改めて、興味を持つて勝見家の人々をひそかに注視することが出来た。
 一番右の端には、一番末の令嬢が、弟の方の令息と一緒に凭りかゝり合ふやうにして、好奇に満ち
 た眼で通夜の客の方をきよ／＼眺めてゐた。その末の令嬢は、まだ十三であらう、お下げに結つ

大寺氏初め、先輩の弟子たちも、それ／＼各自の割當てられた用務に、心を同じうして忙殺されて
 ゐた。それは恰も『先生の死』といふ、一つの大きなオーケストラに、各々心を合せて合奏してゐた
 かの如くだつた。そしてそれは雜めきながらに、高らかに交響しつゝあつた。奏してゐるのは、悲し
 みの曲には相違なかつた。併し小野には、その樂手の一人であるといふことが、妙に嬉しい思ひをさ
 せた。彼はさういふ心を、ひそかに自ら恥しめ畢んだが、併し仕方がなかつた。彼は喜び勇んで先生
 死後の勝見家の用事のために、骨身を惜まず働か氣になつてゐた。
 小野は先を争ふやうにして、つき／＼に來る弔問客を與の夫人たちに通じ、その命を受けて、通す
 べき人は先生の死室に招じ、禮を云つて返すべき人は厚く勝見家を代表した禮を述べて、叮嚀に應接
 し續けた……。

二

かうして、小野は玄關と奥との間を立働いてゐる間に、いつしか勝見家の人たちと、自然見知り合
 ふやうになつた。未亡人、令兄、令嬢、令息たちとも、親しく口をきく機會はなかつたが、顔を合せ
 擦れ違ふだけながら、だん／＼淡い交渉が生じて來た。向うでは、まだ彼の名も、屬性もよく知らな
 いには相違ないが、併し此方では臨終の間では見分けがつかなかつた令嬢たちの顔や、二人とも同じ
 年位にしか見えぬ令息の、それ／＼の相違もはつきりして來た。尤もその長男の新太郎少年とは、宛
 の繪の描きつこをして以來、顔馴染にだけはなつてゐたが、さうしてまた一番上の令嬢も、病室へ行
 く途中の縁側で、ちらりと見かけただけで、さう深く印象に止めずに通過ぎたが、それらもだんだ
 ん小野の網膜に、影を濃く落して行くやうになつた。

た髪の下に、小さな悪戯つ兒らしいくるとした眼を、まだ寸の詰つた子供らしい圓顔から、此方へ頻りに覗かせてゐた。そしてその都度隣の弟に、何か囁いてゐた。その弟の方の令息は、呆けた方を眺めてゐた。

そしてその傍には、弟と同じやうに、曉星小學の制服を着て、足を斜に投げ出したまゝ、上の令息の新太郎少年が、これは一番上の令嬢の膝の上へ、半ば抱き擁へられながら、同じやうに此方を、悪戯つ兒の微笑を浮べ、二重瞼の大きな瞳を据えて、批評的に眺めてゐた。

少年を抱き擁へてゐる一番上の令嬢は、さすがにその弟妹たちのやうに無遠慮に此方を見凝めはしなかつた。彼女ほどちらかと云へば、淋しいしつとりとした質の顔で、ごく普通の女學生風の束髪を俯向け氣味に坐つてゐた。そしてやゝもすれば暴れ出しさうに身を動かす弟を、頻りに抑へ宥めてゐるやうに見えた。併しその弟たちが、何かそつと悪戯めいた言葉を、囁き合ふに連れて、それで

その次には、次女らしい令嬢が、同じ年恰好の令嬢——それは後になつて、先生の實兄の娘、令嬢であること知られた——や、第三女らしい令嬢と、同じ火鉢に顔を寄せて、睦まじげに語り合つてゐた。その次女なる人は、二皮眼の大きな、派手な顔立ちだつた。頬も豊かに釣合よく下膨れがしてゐて、姉と同じく束髪に結つてゐるが、それがもつと洋風な感じを與へ、全體として艶麗といふ質に、可なり近い容貌だつた。そして性質も快活であるらしく、時々聞える話し振りの、作り聲のやうに金屬性の媚びを含んだ甲申聲で、よく鮮かに笑つてゐた。

第三女に當る人は、まだ十五六であらう、令嬢たちのどの人よりも伶俐さうな、端麗な顔をしてゐる様子だつた。

令嬢は、小野の思ひ做しかは知らぬが、これらの令嬢たちと比べると、美しくないことはないが、少し品が落ちるやうに見えた。全體として、可憐な十人並の顔立ちではあるが、額の少し出て廣い下に、眼の少し落ち込んだのが、陰氣な影を作つてゐた。彼女は先生の娘たちに交つて、謙遜さうに身を保つてゐるやうだつた。それは小野にも、何となくいぢらしい、愛憐の心を起させた。

打見たところ、長女である人の容姿は、決して並んだ姉妹の中で、美しいといふのではなかつた。併しその姉たる品格と、しつとりした尋常な様子、いかにも慕しい人柄のやうに、小野には思はれた。どこを、どう好きといふのではないが、靜かな、沁み出るやうな思ひで、小野の心はひそかにその人に牽かれてゐた。けれどもその心はその人をどうしようとか、どうして近づかうとかいふのではなかつた。たゞこの通夜の筵の、同じ悲愁の思ひに満ちた中で、先生が遺愛の娘だといふ一種の尊敬と、そのしつとりとした人柄に對して、わづかな情懷に囚はれたに過ぎなかつた。

通夜の座は、多くの若い人々や、家族の子供たちの集りで、いつの間にかだん／＼賑かになつて行つた。初めは彼らだけで、ひそやかに囁き合つてゐた令嬢や令息たちも、殊に無邪氣な幼い令息たちの言葉から、遠慮なく笑つたり囁したりするやうになつた。此方の弟子たちの間でも、聲高に文學談を交したり、論評し合つたりする者が出来て來た。

と、向うの令嬢や令息たちの間で、突然笑ひ聲が起つた。見ると、その中心になつてゐるのは、例の長男の新太郎少年で、何か此方の弟子たちに奇警な觀察でも下したらしく、皆此方を向いて、くすくす笑ひを止めないでゐるところだつた。

新太郎少年は、其中で、益々得意になつたやうに、姉の膝の上へ立ち上りながら、姉の肩へ一方の手をかけ、一方の手を額に髣して、そして中腰に此方を眺望する様子をしながら、かう何かの聲色もどきに云ひ出した。

「形勢如何にと眺むれば、……みんな變てこな奴らばかりだなア！」

「あら、新太郎ちゃん。そんな大きな聲で云ふもんじゃないわ。」

少年を抑へてゐた姉は、さすがに慌て、止めたが、併し少年の平生を知つてゐる未亡人は、等しく笑つてとめもしなかつた。

また夜が更けて眠い筈の、少年を起しておくには、その位の悪戯は、許すべきものに違ひなかつた。通夜の客たちも、この無邪氣な少年の放言を、迎へるやうに笑ひ崩れた。

「みんな人並の顔をしてゐる奴は、一人だつてゐやしない。同じやうに眉毛を、上へ逆さまに上げてゐる奴ばかりだ。」

と、それを抑擧つて助成させるのが時宜に適つた處置だと思つたのか、黒田がすぐに應じた。

「何だつて？ 新太郎ちゃん。もう一度云つて見給へ。君だつてあそこに寝てゐる、あばた面のお父さんそつくりぢやないか。」

「ふん。」少年は敗けてはゐなかつた。「よせやい。七面鳥。おまへの面は、何度も變るぢやないか。眉毛を上げたり、口をそんなに上げたり下げたりしやがつて駄目だぞ。生意氣を云ひやると。」

「こいつは辛辣だ。」

黒田は頭を搔く外なかつた。一座の人々も、黒田が力を入れて物を云ふ時に、常に昂然と眉を上げ、唇の端を激しく上下げするのを知つてゐるので、皆々笑ひながら、その機智ある觀察を、賞せざるを得なかつた。

新太郎少年は圖に乗つた。

「それから、その次にゐるのが赤鬼だ！」

さう云はれたのは、明かに小野だつた。小野は全くその言葉通りに眞つ赤な血色と、粗い皮膚とを持つてゐた。そして藝術家といふよりは、その弱い心とは反對に、武張つた軍人か鍛冶屋のやうな粗豪な風貌を備へてゐるのを、自ら知つて悲しんでゐた。それをこの少年から今、無遠慮に指摘される、彼は赤い顔を更に眞つ赤にして、仕方なしに笑ふ外はなかつた。が、彼の内心は、美しい令嬢たちの並んだ前で、泣きたい程痛んでゐた。が、少年も一座の人々も、その心を知るものはなかつた。

「ぢやアその次は！」

誰かと訊いた。小野の次に坐つてゐたのは、小野の親友の杉浦だつた。二人は殆どいつでも、隣り合つて座を占めるのが常だつた。

皆の視線は、淺黒い圓顔に、當惑したやうな苦い笑を浮べて、細い目をわざと睨みつけるやうに、少年を見返してゐる杉浦に注中された。が、新太郎少年は奇警な文句が、鳥渡見つからなかつたと見えて、何か思ひ切つた悪戯な批評をと、暫らく考へてゐるやうに見えた。

その時、別な少年の聲がその隣りの方から叫ばれた。それは弟の淳一少年が、兄の云ひ出さぬ間に、ごく單純な考へから、云ひ出したのだつた。

「黒鬼！」

一座はその言葉にでなく、その場の状態に興味を感じて、幾らか義務的に笑つた。が、その中でまた突然一つの抗議が出た。

「あら、さうぢやないわ。黒佛よ！ 鬼よりか幾らか優しいわよ。」

それは、弟の方の少年と、凭れ合つて坐つてゐる、一番末の令嬢が云ひ出したのだつた。

「おや〜。杉浦君には、素敵な同情者がついてゐるんだね。」

一言なかるべからざる黒田が、そんなことを云つて更に笑つた。

が、小野には、なぜか心から笑へなかつた。杉浦に對する漠然たる義望と嫉妬が、自分の先刻受けた苦痛の尾を曳いて、かすかながら續いたのだつた。

大學の制服を着た杉浦は、たじまじ〜と笑つてゐた。通夜の夜は、さうした挿話の中に、もう隣近かつた……

三

その翌くる日は、葬式の前の日だけに、勝見家は猶一層の混雑と、哀悼の中にあつた。先生が死去の報知は、各新聞を通じて、可なり詳細に報道されたので、親しく知つてゐると知らざるを問はず、朝、門を開けるとから、夥しい弔問客が、絶えず玄關に訪れて來た。小野や黒田や原田や杉浦も、殆ど坐る間がない位、その應接に忙しかつた。

その繁忙な受付に従事してゐる間、小野には何ら前夜に感じたやうな、淡いながらの情懷などは、

令嬢たちに對して持たなかつた。彼は只管忙しく、尊敬すべき恩師の家の爲に、骨を惜しまず働いてゐるだけで、他に何らの別な意欲などは持つべき筈もなかつた。

が、併し、その間に、自然かの長女なる人との交渉は、——小野はその朝まだその名さへ知らなかつた。——少しづつ影を濃くして行つた。

ある時、小野が玄關の取次の間にゐるところへ、彼女は自らやつて來た。彼女は弟妹たちと一緒にその時母屋の混雑を避けて、離室の方へ行つてゐたのだつたが、そこから庭の泥濘の中へ、足場に掛け渡された木板を渡つて、わざ〜小野のゐるところへ、姿を見つけると、そつと近寄つて來て、靜かな聲で云つた。

「小野さん。お電話よ——。」

「え——？」

小野は自分の用などで、令嬢がそこに現はれたのではないと思つてゐたので、少しどきまぎして、聞き返さざるを得なかつた。そして彼女が自分の名を、自分の存在を、いつの間にか知つて呉れたのを、何だか急に嬉しく思つた。

「小吉館から。——お下宿でせう。早くいらつしやう。」

「さうですか。どうも有難う。」

彼女はさう云ふと、踵を返してその縁側から下りると、また庭に渡した板敷をかたこと鳴らして先に立つやうに離室の方へ走り去つた。

小野も躊躇してゐる場合ではなかつた。彼はすぐその後から、同じ縁側から下りて、誰のだから庭下駄を、爪先にそ〜と引掛けると、離室にある電話口へ、彼女の後を追うて行つた。

「あゝもうですすか。それは有難う。ほんとにわざ／＼よく……有難うございました。お宅の方々にもよろしく申し上げます。……え、畏まりました。」

小野は何んだと思ひながら、併し下宿の女主人が、わざ／＼電話をかけて呉れたこと、そして下宿の女主人までが、自分たちの先生の死を、悼んでゐて呉れることが、何となく嬉しかつた。そしてその上その電話が、令嬢に依つて偶然に取次がれ、しかもその手を煩はして、人から改めて悔みを受けたいふことが、胸の底を仄々感ぜさせた。彼は満足してそして、電話を切つた。

電話口を離れて、何気なく隣りの部屋を見ると、半ば開け放たれた襖戸の向うに、彼女が炬燵のところから、顔を上げて此方に向いてゐるのに、礎と目を合せて了つた。

「有難うございました。」

小野は少し慌て、かうお辭儀を一つした。

「いゝえ。」

と向うの令嬢も、親しげに會釋をして、なほも此方に向いたまゝ、何か話したげな様子を見せてゐた。

小野も何となく、それだけでは去り難い感じに囚はれた。それで彼は猶一言、説明するやうに附け加へた。

「下宿からの電話で、何の用でもないんですけれど、悔みを云つて來て呉れました。そして先生も二三度、前に彼處へいらしたことがあるとかで、皆さんにも宜しくお悔み申上げて呉れとのことでした。」

電話機は、すぐその入口の處に、取りつけられてあつた。見ると、もう先に歸つた彼女は、その次の間で、——そこは先生の臨終の夕に、新太郎少年がゐたその間だつたが、——やつぱり同じやうに炬燵に當つて、何かにムツかつてゐる少年を寢かし付けようとしてゐるらしかつた。そしてその半ばに、小野への電話の鈴が鳴つたので、外に誰もゐないまゝに、わざ／＼取次いで呉れたらしかつた。

「あゝもし／＼、僕、小野です。——誰方ですか。」

小野は自分の下宿にゐる同宿の人か、または小吉館の電話を借りて、誰か自分の所へ來た客でもが電話をかけたのだらうと思つて、まづさう訊ねてみたのだつた。

「あゝ、小野さんでゐらつしやいますか。」受話器の中で、向うの人の異性らしい聲音が、はつきり響いた。

「此方はね、小吉館でございます。」

「あゝ、小吉館。小吉館は分りましたが、誰方です。」

「いえ、あの小吉館の、主人でございますがね。今度はまた、先生がお亡くなりになりました、さぞ皆さまもお力を落しになつたでせうと、それで失禮ながら、お悔みにおかけ申したのでございます。今朝新聞を見まして、私ども、大變驚きましてね。先生は前に二三度、家へもお見えになつて下さつた御縁故もございしますものですから、早速お悔みに上らうとは存じてゐるんですが、何分お忙しい最中でございますせうし、また私どもが上りましては、却て失禮と存じまして、それで甚だ貴方さまには失禮と思ひましたが、貴方さまに電話をおかけして、貴方さまにもお悔みを申し上げ、先生のお宅の方へも貴方さまを通じて、一言よろしくお悔みを申上げて下さるやうに、お願いしたいのでござい

「まあ、さうですか。」令嬢は思ひの外に、彼に隔意のない親しみを見せて、それからなほ云つた。
 「あの小吉館つて、大學の前のお宮の後にある、急な坂の中途の下宿ですか。」

「え、さうですよ。どうして貴女が彼處を知つてゐらつしやるんですか。」

小野は少し驚いた。そしてそのことが嬉しかつた。
 「まア、やつぱり彼處？ 貴方も彼處にゐらつしやるの。彼處なら、私知つてゐますわ。前に大寺さんがゐらした時分、私、何處も行つて泊めて貰つたこともありましたわ。私がまだほんとに小さい時分ですけれど、……まあ彼處？ 彼處には確かその後で、原田さんもゐらしたことがある筈だわ。ぢやあ随分、色んな人がゐた家ね。」

令嬢は靜かに微笑を含んで、女學生らしい驚嘆の聲を洩らした。

「さうですか。へ、え。さうでしたか。さうとは少しも知りませんでした。」小野は更に妙な嬉しさを覚えざるを得なかつた。その偶然ならぬ、偶然の下宿を同じく知つてゐて呉れたことが、妙に深い印銘を彼女に残したやうに、心の奥で感ぜられたからだつた。

「そして彼處の家の女中さんに、お下げを結つて貰つたり何かしたことがあるのよ。……私、もう一度、行つて見たいやうな氣がするわ。」

「さうですか。」

だが、小野はその後に浮んだ、『ではまた一度お遊びにでも、いらして御覽なさい。』といふ言葉にさすがに書生の無頼を以てしても、殆ど初對面の令嬢に、云ふ厚顔は持たなかつた。たゞ彼は何となく固くなつて云つた。「でもその時分とは、もうすつかり變つて了つたかも知れませんよ。」
 「さうねえ。」

かう問答しながら彼は、この令嬢がまだ十歳前後位の、お下げに結つた幼い姿を、鳥渡想像に描いた。そして今日は昨日の普段着と違つた、木綿物ではあるらしいが、黒紋付の式服を着てゐる姿を、楚々たるものに見取つた。さう血色のよくない、白粉を掃いたとも見えない顔が、夜來の不眠のために、少し黒ずんで見えるしつとりした眼で、他意なく、此方を見返してゐる。……

何故かそれをはつきり見返すと、小野はかうしてゐるのが、悪いやうな氣持に襲はれた。暫らくかうして話をしてゐたつて、別に何の苦痛をも感ずる必要がないのに、彼の心は何となく息苦しいやうな、位置の自覺を呼び起した。何だかこんな處で、圖々しくさう親しくもない令嬢と、いつまでも話をしてゐることは、恥づべきことだと思はれてならなかつた。

で、彼は話題の盡きたのを潮に、殆ど沈黙といふ程の間もおかずに、急いで用を思ひついたやうにもう一度取つて附けた如く、

「では、失禮しました。」

と、云ひ棄て、彼はその電話機に近い入口から、逃げるやうに母屋へ歸つた。そして再び玄關の間に坐つて、何事もなく應接に従事し續けたが、彼の心の中には、何となく仄かなものが萌してゐるのを、時々意識せずにはゐられなかつた。併しそれはゆめゆめ、先生の令嬢に對する、戀心などいふべきものではなかつた。たゞ今までの荒野の如き小野の心に、たゞ僅かあれだけの異性ととの接觸でもが、淡い冬日の光のやうなものを、微かに投げ與へたに過ぎなかつた。それでないとすれば、殆ど近づくを許されなかつた恩師の娘には、はからずも他意ない認識を得たことが、たゞ嬉しい氣を起させたに違ひなかつた。……

かうしてゐる中に、更にその午後、もう一つの交渉が、小野と彼女との間に起つた。

それは彼女の學校友達が、二人打揃つて、白と淡紅の西洋草花の束を携へて、お悼みに来たことだつた。その人たちは、殆ど絶え間もない位、單色な甲問客が打續いた後で、一つの色彩を玄關先に點じたやうに、生々した思ひを、受付にゐる小野たちに感ぜしめた。

二人はお揃ひのやうな、藤紫の紋服を着てゐた。そして玄關先まで来ると、中をちらと窺つて、鳥渡立停つたまゝ、暫らく躊躇してゐるらしかつたが、その中にきまり悪さを思ひ切つたと見えて、一人がつか／＼と入つて来て、顔を赧らめながら伏目勝に玄關内へ立つた。

取次には、その近くにゐた原田が出た。

「誰方でゐらつしやいますか。」

原田は彼特有の、物柔かい調子で、かう促すやうに尋ねた。甲問客の名を聞いて、それを書き留めるのが、彼ら受付の第一の務だつた。

「あの。」併し、その少女たちは、自分たちの名を名告らなかつた。「冬子さんはゐらつしやいますか。」

「あゝさうですか。」と、原田はすぐ合點して、それから後を向いた。「あのお嬢さんのお友達だ。冬子さんはどこにおゐるでになるかしら。」

小野は鳥渡胸を躍らせて、そして小聲に聞き返した。

「お嬢さんつて、何番目の？」

「一番上のだよ。」

原田は幾らか得意さうに答へた。

「あゝさうか。ぢやあ多分離室だらう。僕が行つて知らせて来て上げよう。」

小野は巧みに機會を捉へた譯ではなかつたが、立つに都合のいゝ場所にゐた所から、すぐ立上つて了つた。それは強ちに、その令嬢——冬子といふ名前だとは、その時初めて知つた。——に近づきたいといふ野心からではなかつた。彼はどんなことであらうとも、滲らずに、すぐ用を足さうと思つてゐた上、先刻電話を取次いで貰つた酬いといふのも可笑しいが、さうした一種の義務が、自分にあるやうに咄嗟の間ながら考へたのだつた。そして勿論さういふ交渉が、令嬢との間に生じるとは、それ自身嬉しいことには違ひなかつたが、併しそれは決して意識的の、後の爲にするところの努力ではなかつた。

小野はまた爪先に、庭下駄を引かけるやうにして、板敷の上を駆けて離室に赴いた。

冬子は、其處の炬燵のところに、顔を伏せうとうとしてゐたらしかつたが、小野の足音に眼を醒ましたらしく、少し恍惚した瞳を上げて、入口の所に立つた小野を見返した。

「お嬢さん。」さう呼びかけるのは、小野に取つて始めてであり、何となく恥しくもあつたが、彼はさう呼ぶ外なかつた。「今お友達の方が、二人でお見えになりましたよ。」

「あらさう？—どうも有難う。」

彼女は物憂げな聲で云つた。そして少し身繕ひするやうにした。

それだけでは、何となく物足りないと思ひながら、小野は併しそこに、それ以上留つてゐるべきでなかつた。で、彼は更に、

「玄關の所に待つてゐらつしやいますから、どうぞお早く。」

と、餘計な事を此方でだけ云つて、すぐ引返して来た。が、別に彼はそれ以上のことを、何も望んでゐる譯ではなく、その取次に満足して、玄關の座へまた戻つてゐた。

やがて玄關の前の、先刻の二人が待つてゐるところへ、向うから當の冬子が、生々した顔付をしてやつて來るのが見えた。

三人はその玄關先で、女學生流に親しげな挨拶をして、他所行の丁寧な悼詞を、述べ合つてゐる様子だつた。が、それが済むと、冬子はやうやく勤めるやうにして、その二人を、玄關の隅から上げた。女學生たちは殆ど玄關一ぱいに、控へてゐる受付の前を、腰をかぎめて會釋しながら、恥しさうに擦り抜けて、奥の書齋の方へ、冬子自身に依つて、導かれて行つた。その拍子に、彼女らの、花束から、一莖の水仙の花片が、玄關口に翻れ落ちて残つた。小野は早速それを認めて、拾ひ上げてどうかしたかつたが、何となくそれが氣恥しくて、彼には敢行することが出来なかつた。他の人もそれを認めたかどうか知らぬが、誰も拾ひ上げようとする者はなかつた。そしてそれは、小野が後で氣づいた時は、玄關先の下駄の泥にまみれて、踏み躪られたやうになつてゐた。

暫らくすると、その女學生たちは、先のやうに含羞みはしなかつたが、靜かに玄關を通り抜けて、黙つて丁寧に挨拶をした後、歸つて行つて了つた。と、それを送つて出た冬子に、その女學生たちの姿が少し遠ざかるにつぐ、原田が親しげに話しかけた。

「冬子さん。あの今の方々は、何と仰有るんですか。弔問者名簿へ付けますから。」

「あら、あの人たちまで付けるの。」
冬子は顧みて云つた。その弔問者名簿は、その時丁度運よくも、小野が付ける番に當つて、彼の前に繰り擴げられてあつた。

「え、全部」小野もやうやく發言權を與へられたやうに、早速さう答へた。

「さう？」と、彼女は小野の正面へ、すつと近寄つて來て、帳面を見ながら、もう一度抗辯した。「で

もあの方、私の級の親友よ。私よく覚えてゐるからいゝでせう。」
「さうですね。」小野は併し妙な嬉しさを感じながら、意地悪く云つた。「でも、立派な弔問者に違ひないんですからね。先生の弔問者なら、悉くこの帳簿に載せて置いて、永久の記念に遺して置かなければならないんです。」

「まあ。」彼女は微笑んで、仕方なしに云ひ出した。「ぢやあ、下島文江さんと、藤井はる子さん。」

「お處は？」小野が書きつける傍から、原田が首を差し伸べて聞いた。

「あら、そんなことまで詳しく書くの？」

「禮狀を差上げる都合がありますからね。」

小野も辯解するやうに云つた。

と、その時、奥の方に行つてゐて、ふと戻つて來た黒田が、その問答を聞いてゐたと見えて、傍から高い聲で云ひ出した。

「お嬢さん、その不良少年共に、うつかり住所なんぞ云つちやいけませんよ。」

「馬鹿言ひ給ふな。」

小野は鳥渡自分が圖星を指されたやうに、そつと顔を靨らめた。

と、その時まで隅の方に、まじくと黙つて笑ひながら、その様子を見やつてゐた杉浦が、更に皮肉な諷刺の口を出した。

「兎に角、早く住所を明かした方が、あの人たちの爲ですよ。でない和小野なんぞは、是からすぐに後を付けて、住所を突止めるかも知れませんか。」

「馬鹿を云へ。」

第五 章

小野は少しく色を作して、苦笑しながら怒つた。
「ぢやあ云ふわ。」と、冬子はそれだけの重圍を受けながら、素直に微笑しながら云ひ出した。「下島さんは目白の寮舎よ。それから藤井さんは下谷御徒町三丁目五十八番地。——それでよくつて。」
「え、結構です。——どうも有難う。」
そんなことも小野に取つては、一種の淡いながらに彼女の影を、腦裡に濃くして行つた原因だつた。

二人の淡い交渉に就いては、それからかういふこともあつた。
それは通夜の第二夜のことだつたが、前日來殆ど不眠不休で、通夜と玄關の應接に努めてゐた小野たちは、まだ明日の用務も控へてゐるといふので、未亡人の親切な命令に依り、その夜の通夜は免除された形で、一とまづ身體を休めるために、交代で寝ることになつた。もう宵の口を過ぎて、弔問者も少くなつたし、また少し疎かつた同年輩の弟子たちも、凶報に驚いて集つて来て、その人たちの手傳ひも増えたので、小野と原田とは安んじて、後を黒田や杉浦やその他の人々に任せて、寢室と定めてある離室の方へ赴いた。

その奥の八疊には、平常は令嬢たちの勉強部屋らしく、形ばかりの床の間には、小型な本立や一輪挿しなどが、可愛らしく置き捨てられてあつたが、——既にもう弟子の誰彼が、閑を見ては寝に來

た後と見えて、所狭きまで亂雑に、布圍や夜具が敷きつ放しになつてゐた。手當り次第に持ち込んだものと見えて、中には令嬢たちのものでもあるのか、裏の赤い派手な夜具や、可愛い括り枕などまであつた。が、他の人たちと同じやうに、小野と原田もそんな事に頓着してはゐられなかつた。彼らはその部屋に入ると、その亂雑な彩りに、鳥渡呆れたやうな顔を見合せたが、殆ど遲疑する餘裕もなく、その中の一つを選んで、着のみ着のまゝ寝なければならなかつた。

小野は早速向うの隅の、壁側の一つへ藻ぐり込んだ。そしてもつと誰かゞ、後から寝に來るのを妨げないやうに、びつたり壁側へ寄り付くやうにして、小さくなつて身を横へた。原田もその次の床へ並んで入り込んだ。かうして二人は、一言二言何か話してゐる中に、さすがに前夜來の疲れで、不安ながらに深い眠りを、寧ろ肉體的な眠りを、すつかり寝入つて了つてゐた。……

と、眞夜中頃の事だつた。急に部屋の中ががや／＼と騒がしいので、眠りからぼつかり眼を覺して見ると、五六人の令嬢たちが、向うの入口の襖戸の傍に、一と塊になつて立つたまま、部屋の中を見渡してゐた。彼女らも通夜の座から、夜が更けるまゝに解放されて、こゝへ寝に來たに違ひないらしく、亂暴に引摺り出されて、敷きつ放しにされた自分たちの布圍や、その男子の寄宿舎にもありさうにない亂雑さを、呆れながら感嘆の言葉を發して、驚いたり怒つたりしてゐるのだつた。

「あらまあ、こゝへ私たちも寝るの。」
甘つたるい作り聲のやうな、二番目の令嬢のとすゞ知れる、聲がかう云つてゐた。寢呆け眼に、近眼鏡を取外してゐるので、そのそれ／＼の令嬢たちの姿は、小野にはまるで見えなかつた。

「さうよ。だつて外に寝る處つて無いぢやないの。」
さう答へたのは少し年高の、長女の聲に違ひなかつた。